

Trends in Psychiatry

Theme

書籍 『“脳と心”からみた 統合失調症の理解』



書籍紹介

『“脳と心”からみた統合失調症の理解』
著者：倉知 正佳
発行：医学書院（2016年）

「統合失調症を予後良好な疾患にするためには何をすればよいのか」。その問いの答えを求めて統合失調症の臨床と研究に情熱を傾けてきた著者の集大成ともいえるべき1冊。統合失調症の疾患概念から病態仮説の歴史的進展、神経生物学的研究の最前線までが平易に詳説されており、通して読めば古典的精神医学と現代の精神医学の両方に触れることができる。

先生が精神科疾患のなかでも特に統合失調症をご専門に選ばれたのはなぜですか。

私は人間にとって最も重大な疾患は精神疾患であるとの思いから神経精神科に入局しました。しかし、教授から勧められたのは形態学、つまり神経病理学の研究でした。顕微鏡を覗くばかりの研究に「これは標本病理学では？」という疑問を感じ、臨床症状と病理学的所見との関連を取り上げる神経心理学も学ぶようになりました。当時は脳梗塞の患者

さんが神経精神科によく受診されていたため、主に脳梗塞について脳の病変部位と発生する精神機能障害の関連を研究しました。神経心理学の世界は非常に奥が深く、研究は面白いものでしたが、30歳台も後半に差し掛かると「面白いことばかりするのではなく、患者さんのためになることをしなければ」との思いに駆られるようになり、精神医学の基本問題である統合失調症の研究に取り組もうと考えたのです。統合失調症は青年期に好発し、しばしば慢性に経過することから、患者さんやご家族の人

生に深い影響を及ぼします。「この疾患を予後良好な疾患にするためには何をすればよいのか」、その問いかけに対する答えを探すため、それからは統合失調症の臨床と研究一筋に歩んできました。

統合失調症について実際にどのような研究に携わられたのですか。

海外留学で精神薬理学の手ほどきを受け、帰国後は統合失調症の画像研究を始めました。統合失調